

詩人ガーリブのデリー

片岡弘次

Delhi of Poet Ghālib

Hiroji Kataoka

要 旨

今から200年前、ムガル朝末期におけるデリーの文化・社会状況に焦点をあてる。

1. はじめに

ガーリブ (1797~1869) はインド・パーキスタンにおける大詩人とされている。その詩は『^{ディーワーネ・ガーリブ}ガーリブ詩集』として一冊にまとめられているが、インド・パーキスタンの人々にとってもむずかしく、何冊もの注釈書が出ている。

それらの注釈書を頼りに、なんとか読み通したが、その詩を読みながら、ガーリブの住んでいた今から200年前のデリーの様子がどのようなものか気になった。数年前、インドで P. VARMA がガーリブのその辺のことについて書き、それを GHALIB の題名のもとに出版した。今それをもとにガーリブの住むデリーを説明していく。

2. ガーリブの住むデリーの社会と文化

1) デリーの町

「朝1時ごろ、私は駕籠の中から外を見た。月光の中にデリーと北インドの中で美の中心をなす偉大なイスラーム寺院であるジャーマ・マスジッドが見え、近づくと町を囲むすばらしい赤レンガの壁が見えた。今まで見た中で最も驚くべき月明かりで、川を横切ると私の前にすばらしい都市があった。川はすばらしく、さらにたくさんの異国情緒を示す塔が空までそびえたっており、それはイスラーム寺院のものだった——」¹⁾

これは1848年1月20日のことである。筆者はデリーの前インド総督トーマス・メトカーフ卿の娘であった。彼女が書いている眺めは、ヤムナー川を行く船の上から見た、ガーリブの住むデ

リーだった。

町の前方には砂岩でできたレッド・フォートがあり、町は西方にのび、レンガの壁で囲まれていた。この町壁には北にカシュミール門があり、西にはマリー門、ラホーティ門、アジュメール門がある。南にはティルクマーン門、デリー門がある。町の中にはチャンドニー・チョウク、ファイズ・バーザールの二つの通りがあった。

この町をインドの文化の中心地としたのはムガル朝の皇帝アクバル・シャー2世（1806～1837）であったが、町をさらに町らしくしたのは、その後継者バハードゥル・シャー2世（1837～1857）であった。

2) 皇帝バハードゥル・シャー2世

皇帝バハードゥル・シャー2世は射撃の名手で名騎手でもあった。また詩人としてザアファルのペンネームも持っており、サアディー（1209～1292）の『^{ゴレストーン}薔薇園』の注釈者でもあった。またすぐれた書家であり、画家のパトロンでもあり、デリー派の絵をよくした。貧しい財源にもかかわらず、ムガル朝の庭園の造園にも関心を持っていた。チェスやトランプ、凧合戦や鳩合戦もした。うまい食物、特にマンゴーが好きで、そのせいでマンゴーは町の名物となった。そして美しい女性も好きだった。政治的には弱かったが皇帝としての威厳はあった。詩人ゾウク（1789～1854）が「誰がデリーの町を忘れるか」と言う位デリーの町は立派だったが、バハードゥル・シャーはもはやそこでの偉大な帝国の皇帝ではなかった。しかし依然としてムガル帝国の象徴であった。

3) デリーにおけるイスラーム教とヒンドゥー教

王は敬虔なイスラーム教徒であったが、宮殿内でホーリーやディーワーリーなどのようなヒンドゥー教の祭りも盛大に行なった。ヒンドゥー教を取り入れるヒンドゥー融和策はアクバル大帝（1530～1556）の時から始まった。アクバルはラージプト出身の王女と結婚し、ヒンドゥー教徒を高い地位につけた。バハードゥル・シャー2世の時代、この融合的な文化が生活のスタイルで、王はそれを強めることはしても疑問視することはなかった。

ガーリブは手紙の中でデリーの多くの人を楽しんでいる祭りの様子をつぎのように述べている。「この町には〈花屋の祭り〉と呼ばれている祭りがあり、6月のバードン月（8月から9月にかけての月）に行なわれます。貴族から職人まで町の人すべてがクトゥブ・ミナールに行き、そこに2、3週間滞在します。イスラーム教徒のであれ、ヒンドゥー教徒のであれ、この期間すべて町の店が閉まります」²⁾

ガーリブの住むデリーには、共同社会間のどんな争いもなかった。1854年バクリー・イード（犠牲祭）の時、牛の屠殺がインド総督により許可されると、ある種の緊張感が生まれた。ムガル朝の諸王はヒンドゥー教徒の感情を察して伝統的にイードの時、ラクダを生け贄にし、牛を殺すことを禁じてきた。しかしイギリスはこの禁止を解いてしまった。ヒンドゥー教徒は抗議したが、

両者間の民族的な暴力ざたには到らなかった。ガーリブはこの件にも触れてアグラの人に手紙を書いた。「剣が抜かれたと言われておりますが、ここデリーでは剣は抜かれておりません。争いは起っておりません。この2日間、ヒンドゥー教徒の店は閉ってはおります」³⁾

確かに北インドにおいて民族的紛争が以前にまったく知られてないことはなかった。しかしガーリブの住むデリーにおいていくつかの紛争は、必ずしもヒンドゥー教徒対イスラーム教徒のような異なる宗教間の対立ではなかった。そうでなくヒンドゥー教徒対ジャイナ教徒、イスラーム教徒内のシーア派對スンニー派というようなものであった。人気のある宗教は、お互いの信念や行いを通して折衷主義が行きわたっていた。ヒンドゥー教徒やイスラーム教徒は同じ聖者を共有し、異なる宗教の隣人と一緒に仲よく暮らす術は、バハードゥル・シャー2世の時代、非常に高いレベルにまで達していた。

18世紀の終わり、シャー・ウィッラーによるイスラーム改革もあった。またシャー・イスマイール達によるワッハービー運動もあった。しかしどんな熱烈な論議がされても、暴力や敵意をもたらすようなことはなかった。

4) 宗教とガーリブ

当時、宗教の支配的なテーマは、^{スーフイー}神秘主義の伝統であった。それは12世紀以降力をつけ、ガーリブの時代、イスラーム教徒が従うものとなっていた。スーフイーの考え方は、個人的精神的な体験に力点がおかれ、個人と神の合一を行なわせるもので、宗教的無関心な者には耐えられないものだった。ガーリブは宗教の形式的な部分に必ずしも軽蔑感を表してはいなかったが、1862年の手紙の中で、禁酒を勧めようとするモールヴィーに怒りを表している。「彼がいかに私に酒をふるまうのか。神の教えを教えることによりモルヴィーとしての名声を得ること、神秘主義を学ぶこと、神の真実を表現することなどは別のことである」⁴⁾。実際、当時モールヴィーは酷評と皮肉の対象となっていた。ヒンドゥー教徒もイスラーム教徒もわけへだてなく暮らし、派閥もなかったので宗教の形式的な要求に対しかなりの批判があった。

ガーリブはひとりよがりの独善的な導師の偽善をおもしろがり、からかいもした。

ガザル220-11 1853年

Kahān maikhanah ka darwāzah ghālib aur kahān wā'iz

Par itnā jantē hain kal voh jātā thā kih ham nīklē

どこだ 酒屋の入り口は ガーリブよ どこだ 説教師は

だがこれだけは分かっている 昨日あの方は行くところだった われらが出てくる時

より現実的なレベルで、ガーリブの宗教に対する批判は、それに対する敬虔さを問題にした。

ガザル233-4 1852年

Kyā zahid ko mānauñ kih nah hō garcheh riyāi

Pādāsh-e-'amal ki ṭama' khām bahut hai

禁欲主義をどうして認めよう 勿論みせかけなどではないだろうが
その行為からの報酬の期待が多いので

ガーリブの考えは、人間は真実の宗教的体験に直接、触れることができるというのが彼の持論である。精神的な態度に対し、崇拜の形式は重要でなかった。ガーリブは、宗教的外面をもった忘我は感覚を殺し、精神的な成長を窒息させるものと信じていた。ガーリブの批評の主要的は、伝統にしがみついている人である。

ガザル233-5 1852年

Haiñ ahl-e-khirad kis ravish-e-khāṣ peh nāzāñ

Pābastagī-e-rasm o rah-e-ām bahut hai

知恵ある人は どんな方式を自慢するか

一般に行きわたっている道にとられることが多い。

ガーリブ自身、恐れることなく因習打破の重要性を公言した。

ガーリブはスンニー派に生まれた。だが宮廷や貴族の間ではシーア派とも考えられ、ガーリブ自身、この二重性を楽しんでいた。ガーリブは断食月であるラマザーンの時、断食をせず、王であろうとそれを一生懸命する人を大いにからかった。また酒を飲むから自分は半分イスラーム教徒だと言って、人が彼の行動について批判することには無頓着であった。

ガーリブの宗教的形式に対するこの過剰な軽蔑は、折衷主義や人類の兄弟愛の確信、すべての人間を本体論主義で考えることから来ている。

ガーリブにとり神とは、偽りのない知的確信のことであった。

ガザル112-14 1852年

Ham muwaḥḥid haiñ hamārā kesh hai tark-e-rusūm

Miltēñ jab miṭ gaññ ajuzāi-e-īmāñ hō gaññ

われらは神の唯一性を信じる者 われらの宗教とはさまざまな宗教を止めること

いくつもの国が消えた時 信仰の完成がある

すべての人間、すなわちイスラーム教徒であれ、ヒンドゥー教徒であれ、キリスト教徒であれ
ガーリブは兄弟だという。

ガザル121-8 1853年

Wafādārī basharṭ-e-istwārī-aṣl īmāñ hai

Merē batkhānah meñ to ka'bē meñ garū barhaman ko

献身的な忠誠こそ 信仰の基礎である

もしバラモンが寺院でなくなったら カーバに葬ってやれ

ガザル205-7 1852年

Nahīn kuchh subḥh o zanār ke phundē men givānī

Wahādārī men shaikh o barhan ki āzmāish hai

数珠やひもの輪の中になんの拘束力もない しかし

信仰の強弱に関しバラモンであれシャイクであれ試めされる

イスラーム教徒のガーリブがワラーナシーに居を構えようと考えたのは、いかにもガーリブらしい考え方である。友達につきのように書いている。「私は忠誠を捨てたかった。手に数珠を取りたかった。額に宗派を示す印をつけたかった。腰に神聖なひもをつけたかった。そして存在の汚れを自分で洗い流し、滴のように川と一体になれるように、ガンジス川の川べりに座っていたかった」⁵⁾。ここに組織化された宗教の束縛と狭さから解放されたガーリブの精神が見える。この現世主義の中に、ガーリブが主張することを可能にした確信と知的な完全さがある。

5) ウルドゥー語の発展

折衷主義の気分はウルドゥー語の発展に触媒の役を果たした。ムガル朝はペルシア語を宮廷の言葉としていた。しかし宮廷でもペルシア語の使用が少なく一般の人々の言葉とならなかった。スーフィーは、その考えを伝えるため、大衆により話されていたウルドゥー語を使った。文学において詩人ワリー(1668~1744)はペルシア語を捨ててウルドゥー語に優位を与えた。そしてハーティム(没1669)、ミール・ダルド(没1788)、マズハル(1700~1781)、ソウダー(1730~1780)、ミール(1722~1810) インシャー(没1817)、ナーシフ(没1838)のような詩人が後に続いた。その中でミールやソウダーの貢献は特に有名であった。ソウダーの風刺や皮肉、ミールの愛の詩の哀調はウルドゥー語に偉大な文学的な力を与えた。

1803年はじめて、ペルシア語からウルドゥー語への翻訳がされた。それが宗教的な需要だけでなくウルドゥー散文の発展に与えた影響は大きかった。19世紀のはじめ、このようにウルドゥー語は言語としての力を確実に得ていく。この発展はスーフィーの社会的受容とイスラームの正統性がゆるんでいく中で、ウルドゥー語がムガル朝の宮廷の言葉として、ペルシア語にとって変わって行く環境をつくった。

疑いもなくペルシア語の心理的遺産はなお強かった。ガーリブは、ウルドゥー語をムガル朝の伝統の中で一般大衆のものとして見つけていた。しかしガーリブも結局それを受け入れ、その最もすぐれたウルドゥー語の詩の職人となった。

ガザル117-10 1821年後

Jo yeh kahe kih rekhtah kiyunkih hō rashk fārsī

Goftah-e-ghālib ik bār paḥ ke use sunā kih yūn

ウルドゥーのガザルがペルシア語のガザルを妬むだけのよさを持つかという人には

一度ガーリブの詩を読んでやれ このようだ

6) 詩人と詩会

1830年代までにウルドゥー語は一般の文化的媒介語としてペルシア語にとって代わった。ファルハツラ・バイグはその不滅の古典『デリーの最後の灯』の中で当時の詩会を再現し、ペルシア語で書いた詩人の聴衆の反応をつぎのように述べている。

「そのガザルは多くの賞讃を得た。しかし実際、そのペルシア語は楽しめなかった。ペルシア語を理解できない者は、ただ見ているだけだった。事実、ウルドゥー語の詩会でペルシア語の詩を読むのはよい考えでない」⁶⁾

ガーリブと同時代の詩人にはゾウク、アラヴィー、アズルダ、ナイヤル、アーイシ、モーミン、シェーフタ、ジョーハル、セフバイ、ナズィール・アクバラバーディー、ツフタのような優れた詩人がいた。皇帝バハードゥル・シャーはザアファルのペンネームを持ち、自からも有名な詩人だった。皇帝の詩の師は有名なナスィール^{ウスタード}だった。その後、ゾウクとなり、ゾウクの死後、ガーリブになった。皇帝バハードゥル・シャー・ザアファルのもとで、ムガル朝はウルドゥー詩の開花の中心となった。定期的な詩会が月に2回、月の15日と29日の日に宮廷で催された。また皇子たちも優れた詩人で、毎週、詩会がデリー・カレッジのあるアジュメール門の近くにあるガズィーウッディーン・マドラッサでも催された。また詩人の邸は詩人たちの集まる場所でもあった。

それぞれ有名な詩人は弟^{シャーギルド}子の一団を抱えていた。ウスタードとシャーギルドの関係は特別な関係であり、ウスタードを批判する他のグループにはそれぞれのグループが挑戦に応じた。ウルドゥー詩の書き方や鑑賞は文化的な生活を熱望する者にとって必須な学習となった。ウスタードはシャーギルドの詩の添削や批評をした。当時デリーの詩人であるガーリブと皇帝のウスタードであったゾウクとの間の敵対関係は町中の人々の興味を引き、町中をにぎわせた。

ガザル179-10 1847年後

Hawā hai shāh ka maṣāhab phire hai utrātā

Wagar nah shahar meñ ghālib ki ābrū kyā hai

王の親友となって鼻たかだか

さもなければ 町でガーリブの名誉は何か

詩会を始める前、詩会のための詩の韻律を決めるのに時々、論争となった。その論争の激しさのあまり、皇帝バハードゥル・シャーも詩会を取り止めねばならないことも起るほどだった。詩会で読まれた詩は再び町の流しの楽士により歌われることもあり、詩人が文化的エリートの域に留まっていなかった。

7) 出版と新聞

言語的な活気はデリーにおけるペルシア語、ウルドゥー語の石版印刷により起こり、新聞の出

版も始まった。ガーリブの『ウルドゥー詩集』は1841年に出され、45年にはペルシア語の詩集も出て、ウルドゥー語の人気だけでなく、文学の輪がさらに広まった。

最初のウルドゥー語新聞はモウルビー・ムハンマド・バキールの編集によるものだった。英字新聞も発行され、最初のもは「デリー・ガゼット」で、1830年代までに人々は複数の新聞が読めるようになった。

19世紀なかば、新聞は町からニュース性のある出来事を記事として載せはじめている。ボンベイのウルドゥー語新聞「アフサン・ウル・アクバール」はギャンブルの容疑で1847年逮捕されたガーリブの様子も伝えている。「シーラージ・ウル・アクバール」は週刊紙であったが、宮中の印刷所から出され、宮廷の出来事を報じる掲示板の役割も持っていた。キプロスでのフランスとイギリスとの間の争いのニュースも載っている。記事は必ずしも正確ではなかったが、新聞によりデリーの市民生活が拡大する様相を示している。

8) イギリス人と教育機関

イギリス人の駐留によりもたらされた平静さは、前世紀のようなラクナウや他の都市への詩人などの流出を防ぎ、デリーにおけるウルドゥー語を発達させた。1803年の後、デリーの人口が除々に増え始めたことから分かる。それは町における知的環境の増大となって表れた。イギリスはインドの植民地支配を強化するために、現地の言語や文化をイギリス人の役人が学べるような教育機関をつくった。1781年カルカッタに有名なマドラッサができた。

1791年にはワラーナシーにヒンドゥー・サンスクリット・カレッジ、1800年にカルカッタにホート・ウィリアム・カレッジをつくり、ペルシア語、アラビア語などの作品をウルドゥー語に翻訳することを始めた。アーグラ・カレッジは1823年に創設され、その後ボンベイ、ベンガル、マドラスにも大学ができた。

9) 新しい学問

1824年から1857年の間にかけて、デリー・カレッジは新しい学問の紹介の中心地になった。英語のクラスが1827年から置かれ、ゴールド・スミス、ミルトン、シェークスピア、ベーコンなどの作品が科目として取り入れられた。ウルドゥー語、アラビア語、ペルシア語などのオリент・セクションも開かれ、カルカッタのフォート・ウィリアム・カレッジは東インド会社の職員に東洋の言語を教えるのが目的であった。これはイギリスの役人に実用的知識を与えるところであったが、それを越えて文学的な開花にもおおいに寄与するところとなった。一方デリー・カレッジは、それに反して科学的研究に力を入れ、西洋文化の発達に対し、インドの人々の目を開かせるところとなった。

11) キリスト教の布教

また1813年よりキリストの宣教も始まった。1852年、宣教のための教会も設立された。

ガザル209-9 1853年

Īmān mujhe rōke hai to khēnchē hai mujhe kafr

Ka'bah merē pīche hai kalisā merē āgē

わが信仰がわたしを引き止めようとする

カアバがわたしの後にあれば わたしの前に教会もある

12) 新しい科学とガーリブ

1850年代のはじめ、サル・サイヤド・アフマド・ハーンは、アクバルの治世でムガル統治を記したアブール・ファズルの古典である『アーイネ・アクバリー』の再版を出そうとしていた。しかしガーリブは『アーイネ・アクバリー』に精力を費すことは無駄であるとサル・サイヤドにつきのように言っている。

「イギリスの紳士を見てくれ。——彼らはわれわれ東洋人たちより進んでいる。彼らは風や波は役立つものと考えていない。彼らは火や蒸気の力で船を走らせる。彼らは弦を鳴らさないで音楽をつくる。魔力を持つ鳥のように空中を飛ぶ。ガスが燃され、町は油のランプなしでも明るい。この新しいものが他のすべてのものを時代遅れにさせている。あなたはなぜ、貴重な宝の発見があなたの足下にある時、古くさい時代遅れのものを取り上げようとしているのですか」⁷⁾ 過去の遺物への賞讃が人々の中に本能的にある時、ガーリブは、西洋の知識と科学を賞讃した。

13) デリーのイギリス人社会

デリーにおけるイギリス人の存在感は希薄であった。イギリスのインド総督は市の外に住み、一握りの文官で市を治めていた。イギリスの軍人やイギリス人は彼等が支配していたところから目に見えない所に離れて宿営していた。しかし実際は市民の精神上、イギリスの影響は明白で無視することはできなかった。

前インド総督のトーマス・メトカーフが死ぬと10万人の葬儀参列者があったとガーリブは述べている。その公邸は、レッド・ホートの第1の門の上であり、デリーの住人に見られないわけにはいかない場所にあった。だがインド総督自身はカシュミール門の外にあるマンション・メトカーフ・ハウスに住み、その庭はヤムナー川に接していた。統治におけるインド総督代理を支えている裁判官、医者、牧師、軍人はイギリス人社会の最上部を形成する人々であり、この下に商人、銀行家、統治機構の下位のスタッフを形成する人々のグループがあった。

母親がインド人であるアングロ・インディアンは野心を抱き、土着の血をたくさん持つ者として一段下に見られていた。イギリス人のメンバーの中には、ダルヤー・ガンジに住む人もいた。兵器庫や彼等自身のための教会も建てていた。カシュミール門の内側で家を借りているイギリス

人もいた。このようにしてイギリス人はデリーに自分たちのミニ都市をつくっていた。

イギリス人はデリーにイギリスのような社交場も作り、ヴィクトリア女王の誕生日には舞踏会も催した。毎月、総督の公邸で15、6名を招待してのパーティーも開かれた。

上流のイギリス人の家庭には、料理人、庭師、洗濯人、門番、子守りなど多くの使用人がいた。イギリス人はストッキングを履くのも召使いに手伝わせ、「食べる時、かむことだけは自分でし、それ以外のことはみな使用人にさせている」⁸⁾と言われる程、多くの使用人を雇っていた。またガーリブの友人、ウィリアム・フレイザーは1830年代、公邸に住み、6、7人の正妻を持っていたという。中には13人の妻を持つ人もおり、ペルシアの王のように多くの子供ももうけた。子供たちは母親の宗教やカーストによって、イスラーム教徒であったりヒンドゥー教徒であったりした。

イギリス人の多くはペンネームを持ち、ペルシア語やアラビア語で詩を書いた。またウルドゥー語の学者になった人もいた。

だがこの様にインドに溶け込もうとしたイギリス人に対し、インド人のエリートはイギリス人の生活様式をまねようとはしなかった。勿論、皇帝バハードゥル・シャーの息子、ミルザー・バーブル皇子のような例外の者はいた。皇子はイギリス人の衣装を身につけ、レッド・フォートの中のラング・マハルの後ろに、ヨーロッパ風の家を建てさせ、英国式の車に乗り、長靴を履き、胸に勲章をつけていた。しかしインドのエリートは一般にインドの伝統的な生活様式は変えなかった。多くのインド人はデリー・カレッジで英語を学んだが、まず伝統教育を受けてから、それに加えるものとして英語を学んだ。

イギリス人はインド貴族の生活様式とかみ合わそうとする努力はしたが、その深奥の所まで入っていかず、インド人の反感を買った。ガーリブも多くのイギリス人と親しい関係にあったが、その関係は必ずしも円滑ではなかった。1835年、ガーリブの友人ウィリアム・フレイザーが殺された時の犯人、貴族のシャムスディーンの処刑を巡ってのイギリスの取り扱いや、1837年の大飢饉の際、穀物商人の値段を下げることの拒否などは市民の反感を買った。またガーリブをデリー・カレッジのペルシア語の正教授として迎えようとした時、ガーリブの迎え方はインド人貴族の誇りを踏みにじるものであった。また1847年ガーリブがギャンブルの件で逮捕された時、200ルピーの罰金と6カ月の禁固の判決は、インド人貴族を驚かせた。ガーリブは事件をうまく処理する裁判官を知っているが、ガーリブをまったく知らないように扱う態度には当惑した。行為の正しさへのイギリス人の強調は、インドに対する基本的な態度の変化の表れであった。それをはっきり示すのが1857年のインド大反乱である。

14) 社会生活の変化

ガーリブが10代の時メトカーフがインド総督在職中、サティーや死刑の廃止の発表があった。死刑廃止についてはムガル皇帝の承認がなければならなかった。だがこれらのことはムガル皇帝の権力の幾つかを取ってしまうことにもなった。

一般的にイギリス統治は従来から存在していたものをただちに廃止するというのではなかった。だがイギリス人によって出されてくる新しいものは市民生活にさざ波を立てさせていた。その一つが所得税の導入であったが、ガーリブは1853年の手紙の中で、それに触れている。

「疫病が町にはやっている。つまり東インド会社の代理店は、誰が政府に責任を負うべきかを見るために、過去の書類を調べた。そして代理店は要求を出してきた。事実、要求ではあまりにやわらかすぎる言葉だ。代理店はそれらを調べるために責任を負わせられた。その中で、私も責任を負っていると見られた。500ルピー 8 アンナ、そしてこの額を禁固という条件で要求してきた。8 アンナなら出せるだろう。だが500ルピーをどこから見つけ出せばいいか」⁹⁾

15) 郵便制度

日常生活に衝撃を与えた他の新しい制度は郵便制度であった。特に多数の手紙を書くガーリブには気にかかることであった。

ガーリブは手紙の中で書いている。「あなたはイギリスの郵便制度をどう考えていますか。彼等が取り入れたものが、私には何の制度か分かりません。すべての組織が終わり、私はそれらについて信用できません。不満はメーラットから来ております。アーグラからの手紙にもありません。私の手紙は一通も今まで行方不明になっておりません。しかしこの疫病の流行の中でだれが安心していられますか」¹⁰⁾

デリーの人々も困惑していた。ガーリブは一計を立て、それを友達につきのように書いて送った。

「私はツフタに言ったのですが、切手をはらない手紙を私はあなたに出します。0.5アンナはほんのわずかな額ですが、郵便局は切手のない手紙として扱い、急いで送ります。料金を払ったものはどういう訳か遅れますので」¹¹⁾

1854年、イギリスが郵便箱を取り入れた時、郵便の送付がかなり増加したので、ガーリブの反応は憤りと疑いのあるものとなった。

「郵便制度はこなごなになった。——彼らは大きな箱を郵便局に置いた。それは大きな口を持っている。そして手紙を投函したいと思う人は誰でも行って手紙をその中に入れることができる。受け取り証なし、切手なし、だが手紙を出した証拠がない。手紙が発送されるかどうか、誰にも分からない。もし着かなかつたら、送り主が言い張ることのできる証拠がない。つまり余分な4アンナを支払って書き留めにしてもらわねば。我々は毎日いたるところで手紙を出す。8アンナをどこで得るか、そしてそれらすべてを書き留めにするのか。……要するに手紙を送ることは頭痛の種である。それは混乱を生むものだ。それは暗い部屋の中で矢を発射するようなものだ」¹²⁾

16) デリーの環境

ガーリブの時代、前世紀の略奪と侵略によって起こされた移住により、デリーの人口は減少した。イギリス人が支配権を確立すると、その後、人口が増加したとイギリス人は言う。だが1世紀前の人口より、ガーリブの時代、デリーの人口は少なくなっている。デリーはカルカッタ、ボンベイ、マドラスに較べ特別大きい都市ではなかった。弟子のツフタには手紙で「住所を変えたが、デリーのアサドゥラーと書くだけで手紙は来る」と言っている。

デリーのアリー・マルダンの運河は干し上がってしまっていた。1820年、80年ぶりに運河に水が流れたが、農業用水のため、また水が少なくなってしまった。排水設備も悪く、洪水が起き、マラリヤが多数発生した。水はヤムナー川から山羊の皮袋に入れて運ばれ、町で売られた。

1825年、デリーを訪れた人はデリーの町についてつぎのように書いている。

「デリーの主な通りは本当に広く、きれいだ。アジアの都市としては驚く程だ」¹³⁾

「デリーの通りをよくドライブして楽しんだ。大理石の建物はすばらしかった。人々の着ているものもすばらしかった」¹⁴⁾

またこういう記述もある。

「デリーの町の通りは穴だらけで、雨期のたびに泥いっぱいになった。人は泥から出ている石をつたわって、店の軒ぞいに歩いた。乾期には埃が雨より多かった」¹⁵⁾

「現在のデリーよりも多く、蠅に荒されているところはない」¹⁶⁾

1854年、伝染病がデリーを震撼させた。ほとんどの家の者がそれにかかり、死者も出たとガーリブは述べている。種痘とマラリヤは最もはやった病気だった。ガーリブが養子にした甥のアリフもマラリヤで1852年になくなり、アリフの妻もそれでなくなった。ガーリブも種痘にかかった。結核は当時、死の病いとして恐れられていた。

デリーに医者はいたが、伝統医学の系統をひくものだった。清浄、食事制限、伝統的な家庭療法がすべての病気に対する療法で、ガーリブもこの分野に豊富な知識を持ち、友達や親戚の人達に治療を施すのが好きだった。

イギリス人にとりインドのこのような医療は満足できるものでなく、イギリス人は時々、インドの黒い大きな丸薬に不快感を示した。イギリス人にとり一番の敵は暑さであった。乾し草で出来ている衝立てを戸や窓に取り付け、その上に水を流し、風が通る時、冷たくなるようにした。直射日光の入らない厚い壁のある部屋で、夏の暑い日を過す伝統的な仕方もあった。冬の12月頃の晩に作っておいた氷も使われた。

17) 封建貴族

封建貴族の金持ちはデリーにたくさんの土地を持っていた。二人の貴族についてガーリブはつぎのように書いている。「これら二人の貴族の血筋の者は数軒の屋敷、ホール、宮殿を持っている。これらは隣接しており、それらが建っている土地の広さを測ったら、それは村の広さと同じに

なった、町の広さでないとしても」¹⁷⁾。しかし封建貴族の多くは貧窮化してしまい、生活を支える手段はなく、貴族出身であることだけを誇りにしているだけだった。ガーリブは自分については「二人のガーリブがいる。一人は王家と混血しているセルジューク・トルコ人であり、もう一人は借金だらけの貧しい詩人である」¹⁸⁾と書いている。

そのような貴族を見ていたデリーの市民は「デリーの貴族は100カ所もつぎはぎのある靴を履いている」¹⁹⁾と述べている。

デリーにはまた新ナワブという新しい階級も出来た。それは今までの金持ちが没落し、一文なしのナワブになった者をさす言葉であった。

都市の商人——そのほとんどがジャインとカトリー——穀物や食料そして金融の仕事に関係していた。金融においては、高利で金を貸す者であった。都市の商品（財）を金貸しに移すことは、田舎においてと同じように都会でも衝撃的なことであった。デリーのチャンドニー・チョークのイスラーム教徒の地所が、すでに1857年以前、商人家族へ抵当に入っていた。ガーリブ自身も生涯、高利貸しに世話になった。

疑いもなくチャンドニー・チョークはデリーの商業地区の最も有名な地域であった。イギリス人は、その名前を銀の工芸通りと誤って言っていた。フルーツ、織物、武器、鳥、動物、手工芸品などあらゆる物が売られ、特に宝石商や銀細工の店が多かった。そのような店では軒先に飾って売るのでなく、店の裏に品物が置かれ、売買はそこで行なわれた。

当時デリーにおけるヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の数はほぼ同数の半数ずつであった。都市の貧しい人の多くは土を固めた家に住み、2時間も雨が降ればつぶれてしまうような家に住んでいた。マリー門、アジュメール門、ティルクマーン門、デリー門の所には屠殺人、皮屋、なめし皮職人、土木関係の人が多く住んでいた。

18) 生活費

生活費は現代と較べ信じられない程の安さであった。1ルピーで小麦が40セール、ギヒーなら4セール買えた。イギリスは当時、月3ルピー以下の収入で荒ら屋に住む人を貧乏人と規定していた。ガーリブは月々の収入を増そうと年金訴訟に奔走していたが、この計算でいくと、毎月62～65ルピーを得たことは²⁰⁾、驚くべき収入であったと言わねばならない。

19) 人々の娯楽

人々は貧しかったが娯楽や町の催し物で大いに楽しんでた。詩人ミールを嘆かせたのはこの説明できない魅力からであった。「デリーの崩壊はラクナウの10倍よりよい。私はそこにいて死にたかった。ここでぶらぶら生きるのではなく」²¹⁾とミールに言わせている。

デリーを訪れる者は必ず、地平線上に点々としている風が目に入った。特に雨期に多く、デリー門の近くのヤムナー河の岸で風合戦がよく行なわれていた。ガーリブは皇帝の命で幾度も皇

帝に従って風合戦に行かなければならなかった。それは毎夕、行なわれていた。鳩合戦も人気のある娯楽であった。デリーの町を通る皇帝バハードゥル・シャーの行列はいつも宮廷の鳩を入れた箱も象が運んでいた。毎日の料理競べや年に1度の水泳大会も人々の楽しみであった。水泳大会はヤムナー河で行なわれた。レスリングも行なわれた。ジャーマー・マスジッドの階段では物語り師がいつも人を集めていた。チャーンドニー・チョークの通りは歩くだけでも楽しかった。居酒屋もあり、ほとんど一晩中あいていた。地酒に加え、フランス産のブドウ酒も手に入った。ガーリブは毎晩飲み、フランスの酒を飲むのが自分の好みだと言った。酒、居酒屋、酌人そして導師の偽善は詩の象徴として繰り返し出てくる。雨期にはみずみずしく咲く花を見て歩いた。冬には庭園を散歩し、パコーラーなどを歩きながら食べた。アクロバットなどのショーもあった。芸人は宮廷の保護を受けていたが、バハードゥル・シャーの時代には自分たちで生活費を稼がねばならず、以前より多く人前で演じなければならなかった。時々、町を通る皇帝の行列も見ものだった。シャー・ジャハーン時代の富と権力のショー程ではなかったが、象の行列は拍手喝采を浴びた。

金曜日にはたくさんの人が礼拝で、ジャーマー・マスジッドに集まった。脱ぎっぱなしの靴の多さを見て、イギリス人は、礼拝の後、自分の履物が分かるかどうか心配した程であった。

不安と経済的衰退で占星術師がもてはやされる社会である。カースト制が生活の中に受け入れられ、イスラーム教徒にもそれが影響を及ぼし、食事のタブー、不潔感、結婚の制限など、イスラーム教徒とヒन्दゥー教徒の両方に共通であった。

20) 人々の身なり

当時の社会には今日あるような都市生活の疎外感や根なし草的な感じはなかった。各人はカーストや地域的・職業的な共同体の一員として、帰属感を持っていた。それが同一の行動様式を取らせていた。その点につきガーリブは「このぶざまな格好の市で、誰もががある種の制服を身につけている。ムッラー、ジュンク・ディーラー、水タバコ屋、八百屋これらすべて髪を長くし、ひげを伸ばしている」²³⁾と述べ、単一性に腹をたてている。一般の人は手織りの綿の服を着ていた。職人は金具のついた帽子をかぶり、無地の服を着るのを好んだ。金持ちは絹地の服をきて、刺しゅうのあるショールを羽織っていた。貴族はかなり衣装に関心を持ち、日中は正装であった。絹地のターバンを巻き、服地には金糸、銀糸の刺しゅうがされているものを使った。

21) 娼婦

重要な制度は娼婦のサロンであった。保守的な社会において、パルダールの制度は、当然なことで、性を人目から隠すことが社会の規範であった。娼婦の世界は社会的に禁じられてはいず、女性と接触する場を与えた。そしてそこに、ロマン、渴望、別離、抱擁のすべての詩があった。このようにして「恋人のイメージは娼婦のイメージ、家族のない女性、そしてその理由のために、

そのような女の人は純粹に美的な概念に変形できた」²⁴⁾

娼婦は社会で受け入れられた一部であった。ガーリブはこの件について手紙で述べた時、道徳的判断は加えなかった。ガーリブの友人、ムザアファル・フサイン・ハーンが恋していた娼婦が亡くなると、ガーリブは我慢してこの苦しさに耐えよと忠告し、娼婦の制度は批判していない。男は生来、一夫多妻的なところがあると考えられ、特に貴族や金持ちの間で、家の外で恋をすることは社会的に認められていた。時々、踊り子が男を経済的に破滅させることもあったが、踊り子は自分自身をアウトカーストとは考えていなかった。当時有名な踊り子としてウムラーオ・ジャーン・アダーがいたが、教養ある踊り子と考えられていた。踊り子同志の間で、ライバル関係は当然のごとく存在した。

社会は踊り子を社会の一部を成すものと考え、祭日や聖者の命日には歌ったり踊ったりした。ガーリブの年金訴訟とも関係があり、ガーリブを苦しめたナワブ・シャムス・ディーンが、別件で事件を起し、イギリス政府に処刑された時、娼婦はその運命をいたむ歌を作り、それが非常に有名になった。

3. 文化の都会性

ガーリブのいたムガル朝末期は、政治的、経済的、社会・文化的に崩壊の時で、イギリス人が厳然たる力を振り始める時であった。だがムガル朝皇帝の面目をつぶすまでには到っていなかった。

当時、ムガル朝の宮殿は行儀作法の学校のおもかげがあったという。それ故、社会一般に古きよきしきたりも残っていた。

詩会でもし客が間違った席に座った時、主催者側は、その客の気分を害すような注意の仕方はしなかった。まず誰かあいている席に行き行って座わり、他の人が客のところに行き、それとなく話しをし、頃合いを見計って座わるべき席に案内するのがならわしであった。

このような都会性がデリーの町に続くのはインド大反乱が起こる1857年までであった。

ガーリブはこの都会性のなかに生き、その構造の組織的な衰微と崩壊をも目撃したムガル朝の貴族であり、詩人であった。

注

- 1) Emily Bayley, *The Golden Calm*, New York, 1980, p. 122.
- 2) Ralph Russell and Khurshidul Islam, *GHALIB Life and Letters*, London, 1969, p. 302.
- 3) 前掲書, p. 123.
- 4) 前掲書, p. 217.
- 5) S. A. I. Tirmizi, *Persian Letters of Ghalib*, New Delhi, 1969, p. 31.
- 6) Akhtar Qamber, *The Last Mushairah of Delhi*, New Delhi, 1979, p. 60.
- 7) Q. Hyder, S. Jafri, *Ghalib And His Poetry*, Bombay, 1970, p. 30

- 8) Pat Barr, *Memsahibs*, London, 1976, p. 79.
- 9) Ralph Russell and Khurshidul Islam, *GHALIB Life and Letters*, London, 1969, p. 113
- 10) 前掲書, pp. 113-114.
- 11) Q. Hyder, S. Jafri, *Ghalib And His Poetry*, Bombay, p. 26.
- 12) 前掲書, p. 26.
- 13) Bishop Heber, *Bishop Herber in North India*, Cambridge, 1971, p. 235.
- 14) Emily Bayley, *The Golden Calm*, New York, 1980, p. 162.
- 15) C. F. Andrews, *Zakaulah of Delhi*, London, p. 16.
- 16) W. H. Sleeman, *Rambles And Recollections of An Indian Official*, Vol. II , London p. 310.
- 17) Ralph Russell and Khurshidul Islam, *GHALIB Life and Letters*, London, 1969, p. 148.
- 18) N. Gupta, *Delhi Between Two Empires*, Oxford, 1981, p. 52.
- 19) Ralph Russell and Khurshidul Islam, *GHALIB Life and Letters*, London, 1969, p. 111.
- 20) PAVANK. VARMA, *GHALIB*, New Delhi, 1989, p. 80.
- 21) Ralph Russell and K. Islam, *Three Mugal Poets*, London, 1969, p. 80.
- 22) PAVANK. VARMA, *GHALIB*, New Delhi, 1989, p. 81.
- 23) Ralph Russell and Khurshidul Islam, *GHALIB Life and Letters*, London, p. 41.
- 24) M. Mujeeb, *Ghalib*, Delhi, p. 14.